

はあ夜中になっても暑いからポリネシアンしたいヒーローについて妄想しても良いブヒ？

>いいよ

ありがとう続けるねやっぱリブヒ的にポリネシアンで腰ヘコ交尾して欲しいヒーローと言えばケツ毛先生ブヒ

なんかいい感じにイベント締めたあとでやらせて下さいって土下座したら断らなさそうだし武士に二言はないとか言って自分の首絞めてそうで可愛いブヒ

初日

夕暮れのラブホの部屋は、柔らかな間接照明だけが灯っていた。カーテンは締め切られ、外の喧騒は遠く、異世界の小さな箱庭のようだ。

おれはベッドの端に腰掛け、向かいに座るトウシュウを見つめていた。普段、鬘を結った髪は後ろに流され、濡羽の鬘が肩まで落ちている。紫紺に輝く鋭い瞳は、やや所在なげに揺れていた。異星人でありながらサムライに憧れ、己を律する日々を送る大学講師であり、剣道部の顧問を兼任する彼だが、今日はいつもの着物姿ではなく、シンプルなシャツとスラックスに着替えていた。それでも背筋はぴんと伸び、武士のような気品を湛えている。

「拙者……貴様とこうして向かい合うだけでも、胸がざわつくわ」

トウシュウは視線を少し逸らし、耳の先がわずかに震えていた。ツンデレの彼が、こんな状況でなければ口に出さないようなことを言った事実に対し、少し驚く。これから5日間、おれたちは時間をかけてセックスをする。今日はお互いに向かい合って、好きなところを言葉に出す日だ。おれは微笑みながら、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「トウシュウ先生、まずはおれから言います。先生の鬘、触れたいけど今日は我慢する。朝日に照らされると本当に美しい。まるで古代の王みたいだって思っていました」

「……ふん」

彼は鼻を鳴らしたが、頬がわずかに赤らむのが見えた。俺は続ける。

「トウシュウ先生の声が好きです。古風で、拙者とか貴様とか言うところが。大学で講義してる姿、想像するだけで胸が熱くなる。学生たちも尊敬してます。剣道の顧問として、竹刀を振るう時の凛とした姿勢……最高に格好いい」

トウシュウの尾がピクピクと動いた。爪が膝の上で軽く握られ、恥ずかしさを堪えているのが丸わかりだ。

「先生の真面目なところが好き。異星人なのに、日本文化にここまで没頭して、毎日自分を高めようとしてる。サムライみたいに律する生き方、おれは尊敬してる。朴念仁なところも、ツンとしての顔も、全部可愛いよ」

「か、可愛いなどと……！」

彼の声が上擦る。おれは笑いを堪えながら、さらに言葉を重ねた。

「目が合うとドキッとする。紫色の瞳、深くて吸い込まれそう。先生がおれの名前を呼んでくれる時の声、特別に優しくなるよね。観測者……って。心を許した時だけだ。あの響きが好きだ」

トウシュウの顔が赤くなり始めた。耳の付け根まで真っ赤だ。おれは止まらない。

「体格も好き。獅子らしい逞しさ、自分への厳しさが出てると思う。でもおれを抱きしめてくれる時の優しさを知ってる。今日は触らないけど、トウシュウ先生の温もり、思い出してるだけで、おれ……」

「も、もうよい！」

トウシュウが突然立ち上がりかけたが、座り直した。顔は真っ赤を通り越して、紫色に近いほどに染まっている。息が荒く、尾が激しく左右に振られていた。半ギレの表情で、紫紺の瞳がおれを睨みつける。

「ペラペラと軽薄なことを！ 拙者のほうが……拙者のほうが、貴様のすべてを好いておるわ！ 向こう見ずに危険なところに顔を突っ込む時、貴様はいつも誰かのことを考えている！ その律儀さも、言葉を選んで拙者を褒める優しさも、拙者を見つめるその目も……全部、拙者のほうが深く好いておるというに！」

バチギレ音量で叫ばれて耳キーンなる。

叫びながら、彼は両手で自分の顔を覆った。耳まで熱を持ち、肩が小刻みに震えている。

部屋に静寂が落ちた。おれはただ、微笑みながらその姿を見つめていた。

この武士ツンチョコ口過ぎるブヒ。

## 二日目

寝間着を着たままバードキスの日

夜のラブホの部屋は、昨日より少しだけ空気が甘く感じられた。シャワーを浴びた後の清潔な肌が、薄暗い照明の下でほのかに輝いている。

トウシュウ先生はベッドの中央に腰を下ろし、昨日とは違い、意を決したように真っ直ぐにおれを見つめていた。紫紺色の瞳に、わずかな緊張と熱が宿っている。鬘の間から覗く耳は、まだ少し赤い。

「観測者……今日は、拙者もちやんと貴様を見る」

低い、古風な声が響く。俺は微笑んで彼に近づき、まずはそっと頬に手を添えた。

「トウシュウ先生、今日も格好いいですよ。この広い胸、逞しい肩……剣道で鍛えた体、触れるだけで心が落ち着きます」

指先で彼の肩から鎖骨へ、ゆっくりと撫で下ろす。固く引き締まった筋肉の感触が、掌に伝わってくる。トウシュウの息が少し乱れた。

おれは彼の胸に顔を寄せ、優しく唇を押し当てた。布越しに、軽いキスを繰り返す。

「ここ、好きです。心臓の音が聞こえるみたい。先生がどれだけ真剣に生きてるか、伝わってくる」

「ん……」

トウシュウは低く唸るような声を漏らし、大きな手でおれの背中を抱き寄せた。彼の指がおれの腰から背中を優しく撫で上げる。力加減は丁寧で、獅子の獣人らしい逞しさを感じさせつつ、傷つけないよう細やかだ。

俺はトウシュウ先生の首筋にキスを落とし、耳元で囁く。

「先生の腕、好き。おれを抱きしめてくれるこの力強さ……安心する。ヒーローとしてカイクツも向かい合う時の凛々しい姿と、同じ体なんだと思うと、興奮します」

トウシュウの頬が再び赤らむ。彼はおれの額に、啄むような軽いキスを返した。続いて頬、こめかみ、そして唇の端。浅く、何度も角度を変えて触れてくる。少し冷たくてチクチクしたウィスカーパッドは、性格のお硬さとは異なる柔肉でおれの唇に応えてくれた。

「ぐ……拙者も……。貴様の肌は、柔らかいな」

彼の声は照れくさそうに低く、言葉は少ない。それでも大きな手はおれの肩や腕、腰を丁寧に愛撫し、時折指先で軽く搔くように撫でる。おれはトウシュウの胸や腹部に何度もキスを散らし、褒め言葉を重ねた。

「ここも素敵です。腹筋が浮き出てる……毎日自分を律してる証拠だね。トウシュウ先生の努力、全部好き」

「くっ……そんなに褒めちぎりおってからに、拙者は……」

トウシュウは言葉を飲み込み、代わりにおれの首筋に顔を埋めて軽くキスをした。熱い息が肌にかかる。おれの背中を大きな掌で包み込み、ゆっくりと上下に撫でる。互いの体温が混じり合い、部屋の空気がさらに甘く重くなった。

おれは彼の手で自分の手を重ね、指を絡めながらもう一度唇を重ねた。軽く、啄むように。何度も、何度も。硬くなった指先、潰れた剣ダコ、ざらついた肉球。好きを唇に乗せて、トウシュウ先生に伝えるように。

トウシュウの尾が俺の脚にそっと巻きつくように寄り添い、離れない。言葉は照れ臭くて出てこない彼なりに、体全体で想いを伝えてくれているのがわかった。

夜はまだ深く、触れ合う時間はゆっくりと続いていく。

### 三日目

昼間はいつものように別々の生活を送った。

トウシュウ先生は大学で講義をこなし、剣道部の顧問として後輩たちを厳しく指導した。竹刀を振るうたび、心のどこかで観測者の姿がちらつき、己の律を保つのに苦労した。観測者もまた、普段通りの日々を過ごしたはずだ。

夜、部屋に戻ると互いの視線が絡み合い、言葉少なに体を寄せ合う。

「観測者……今日は、随分と拙者の目を誘うような視線を送るではないか」

そう言いながら、トウシュウは観測者の腰を引き寄せた。獅子獣人の逞しい腕が、熱を帯びて背中に回る。まだ完全には心を開ききっていないものの、三日間の焦らしの影響は明らかだった。耳の先がピクピクと動き、紫の瞳がわずかに潤んでいる。

二人はベッドに腰を下ろしたまま、深く唇を重ねた。

「ん……っ」

最初は軽く触れ合うだけのキスだったが、トウシュウの方から積極的に舌を滑り込ませてきた。観測者の熱く湿った口内が、獅子獣人の舌を迎え入れる。獣人特有の体温が高い舌が、ねっとりと絡みつき、口腔の粘膜を擦り合わせる。水音が部屋に響く。くちゅ……くちゅる……という淫靡な音が、二人の息遣いに混じった。唾液が交換され、甘く熱い味が互いの舌先に広がる。トウシュウの唾液は少しだけ獣らしい野性味のある香りがして、観測者の口内を満たしていく。

「は……っ、貴様の……口の中、熱いな……」

「先生も、もっと……っ」

トウシュウはキスを少し離して息を吐きながらも、すぐにまた深く沈めてきた。今度は彼の大きな手が観測者の胸や腹を優しく撫で下ろし、徐々に下腹部へと降りていく。抵抗が薄れた証拠に、指先が積極的に動く。ズボンの上から性器の形を確かめるように軽く揉み、親指で先端の辺りを円を描くように刺激した。

観測者も応じるように手を伸ばし、トウシュウの股間に触れた。

その瞬間、トウシュウの大きな体がビクンと震える。

「う……っ！」

三日間、毎夜のように焦らされ続けた肉太刀は、すでに完全に反り返り、褌の布地を内側から強く押し上げていた。触れただけで熱く脈打つ感触が伝わってくる。中へと手を滑り込ませると、びしょびしょに濡れた肉棒が飛び出すように現れた。完全に勃起しきったそれは、百獣の王に相応しい太さと長さを誇り、血管が浮き出た表面が熱を帯びて脈動している。

先端からは、射精を必死に我慢しているかのように、ダラダラと大量の先走りが溢れ続け、透明な糸を引いて太ももへと垂れていた。

「観測者……触るな、といっても……もう限界だ……」

トウシュウの声が低く掠れる。高まった性欲が、筋肉質の広い胸や腹の奥で渦巻いているのが、手のひらを通じて伝わってきた。体全体が熱く火照り、軽く触れただけで腰が小さく跳ね、獣の尾

がベッドの上でピンと立っている。朴念仁の彼がここまで欲情を露わにするのは珍しい。三日間の積み重ねが、己を律する心を少しずつ溶かしていた。

観測者の指が肉太刀の表面をゆっくりと撫で上げると、またしてもトウシュウの巨体が震えた。熱い粘膜のような亀頭を親指で軽く擦ると、さらなる先走りが溢れ、手のひらをぬるぬると濡らしていく。水音を立てながら指を動かすたび、トウシュウの喉から低いうなり声が漏れた。

「く……っ、観測者よ……拙者のこの……情けない姿、よく見る……」

ツンとした言葉とは裏腹に、瞳は熱く蕩け、唇を再び求めて深くキスを重ねてくる。口内では舌が激しく絡み合い、唾液が糸を引くほどに交換され、二人の体温が混じり合って部屋の空気をさらに熱くした。

三日目の夜は、まだ始まったばかりだった。トウシュウの抑えきれない獣の欲情が、これからどれだけ観測者を飲み込んでいくのか。二人の時間は、ゆっくりと、しかし確かに深みを増していった。

#### 四日目

昼間は互いに普段の生活を送ったはずだ。

トウシュウは大学で講義をこなし、剣道場では竹刀を振るう姿を師弟たちに見せていたが、動きの端々に苛立ちと熱が混じっていた。観測者もまた、日常を過ごしながら夜のことを考えずにはいられなかった。

ラブホテルの部屋に戻ると、ドアを閉めるや否やトウシュウが観測者を壁に押し付けるように抱き寄せた。

「観測者……今日は、拙者をどれだけ焦らすつもりだ……」

声は低く、鼻息が荒い。紫の瞳が欲情で揺れている。三日間の蓄積が、獅子獣人の理性をじわじわと溶かしていた。

二人はベッドに倒れ込むように絡み合い、服を乱暴に脱がせ合った。素肌が触れ合うと、互いの体温が一気に高まる。トウシュウの逞しい胸板と腹筋が、観測者の体に密着した。

まずは深いキスから始まった。舌が激しく絡みつき、唾液を交換しながら水音を立てる。トウシュウの大きな手が観測者の胸を掴み、乳首を指の腹で優しく転がした後、徐々に爪を立てるように少しハードに刺激してきた。ピリッとした痛みと快感が混じり、観測者の体がビクンと跳ねる。

「ん……っ、トウシュウ……」

「ふっ……ふうっ！ 感じているな。その顔、拙者以外に見せるでない……」

トウシュウの指は容赦なく性感帯を攻め立てる。首筋を歯で軽く甘噛みし、耳の裏を熱い舌で舐め上げ、内ももを大きな手で強く揉みしだいた。観測者も負けじと応じ、トウシュウの乳首を指で摘まみ、爪を立てて刺激しながら、もう片方の手で彼の完全に反り返った肉太刀を優しく包み込んだ。

トウシュウの太く長い大業物は、前日以上に熱く脈打っていた。先端からは既に大量の先走りが溢れ、手のひらをぬるぬると濡らしていく。ゆっくりと上下に扱きながら、親指で亀頭の裏を優しく擦ると、トウシュウの巨体が震え、鼻息がさらに荒くなった。

「はあっ……はあっ……観測者よ……拙者のここを、そんなに優しく……くっ……」

お互いの性器を優しく、しかし執拗に愛撫し合う。時折強く握ったり、速さを変えたりして快感を高めながらも、絶対にオーガズムには達しないよう、互いに呼吸を整えながらコントロールする。トウシュウの肉太刀を扱く手が少し速くなると、彼は低く唸りながら観測者の性器を握り返し、根元を強く圧迫するように刺激してきた。

「挿れたい……拙者はもう、貴様の中に……っ」

「おれも……トウシュウせんせの熱いので、満たされたい……」

鼻息を荒く吐き合いながら、悶々とした欲求を言葉に漏らす。挿入したい、射精したいという強い衝動が二人を苛むが、まだその日ではないと互いに耐えていた。

性器同士を擦り合わせ、ぬるぬるとした先走りを絡めながら、ただただ気持ちよさを味わう。トウシュウの尾がベッドの上で激しく動き、獣の欲情が全身で渦巻いているのが伝わってきた。

長い時間をかけてお互いを高め合った後、徐々に手の動きを緩めていく。激しかった愛撫が優しい撫でるようなタッチに変わり、最後にはただ互いの性器をそっと包み込むだけになる。

「はあ……はあ……もう少しで、果てるところだった……」

トウシュウが掠れた声で呟き、観測者を強く抱き締めた。逞しい腕の中で体を預け合い、軽いキスを繰り返す。唇を優しく重ね、舌を軽く触れ合わせながら、荒かった息を整えていく。

「観測者……拙者は、まだ貴様を完全に自分のものにはできぬ……だが、明日か。明日、覚えておれ」

最後に額をくっつけ合い、穏やかなハグで四日目の夜を締めくくった。体はまだ熱く疼いていたが、二人の間には甘く濃厚な余韻だけが残っていた。

## 五日目

顔を合わせた瞬間に、必要ないとばかりに衣服を脱ぎ散らかす。畳む間も惜しいほどに発情した二人は、食らいつくようにベッドへもつれ込んだ。

これまでの四日間をゆっくりと辿るように、キス、愛撫、性感帯への刺激、性器同士の焦らしをたつぷりと重ねる

トウシュウは観測者の脚を大きく押し広げ、自身で塗ったローションと先走りでぬるぬるになった入り口に、熱く膨張しきった肉棒の先端を押し当てた。

「観測者……もう、拙者は……限界だ……」

声が震えていた。鼻息は荒く、獅子の耳がピンと立ち、尾が激しく左右に揺れる。五年分にも感じられる焦らしの果てに、ついに繋がる瞬間が来た。

トウシュウが腰をゆっくりと押し進めた瞬間

「んあぁっ……！」

観測者の喉から思わず声が漏れた。太く長く、熱く脈打つ獅子獣人の肉太刀が、内部を容赦なく押し広げながら入ってくる。亀頭の張り出した部分が窄まりをこじ開けるように進み、熱い肉の塊が一気に奥まで沈み込んだ。内壁が限界まで伸ばされ、熱い摩擦と圧迫感が全身を駆け巡る。痛みと快感が混じり合い、背筋がビクビクと痙攣した。

「ぐっ……！ うおお……っ！」

トウシュウも同時に低く獣のような唸りを上げた。巨体がガクンと震え、背中の筋肉が浮き上がるほど力が入る。熱く締め付ける内壁に包まれた瞬間、彼の肉太刀が中でさらに硬く跳ね上がり、大量の先走りが勢いよく噴き出した。

「熱い……中が、熱くて、きつい……！ 観測者……お前の中、拙者のものを根元まで飲み込んで……くっ、ううっ！」

根元まで完全に埋まった状態で、トウシュウの腰が小刻みに震えていた。繋がった部分からは結合部がひくひくと動き、溢れた愛液と先走りが混じって淫靡な水音を立てる。トウシュウの大きな手が観測者の腰を強く掴み、爪が少し食い込むほどだった。

二人はそのまま、ほとんど動かずに深く繋がったまま時間を止めた。

トウシュウの肉棒は内部でビクンビクンと激しく脈打ち、時折大きく跳ねて観測者の最奥を突いた。萎えかける気配を見せると、トウシュウは小さく腰を前後に動かし、敏感な粘膜を擦り合わせて再び硬さを取り戻しては、またピタリと動きを止める。それを繰り返しながら、荒い息を互いの耳元に吹きかけた。

「はぁっ……はぁっ……五日間……我慢した甲斐があった……この感覚……忘れられん……」

トウシュウの声は掠れ、普段の朴念仁で古風な口調が崩れかけていた。紫の瞳は蕩け、汗が滴り落ちる。獣の牙が少し覗くほど唇を噛みしめている。観測者の中を満たす圧倒的な熱さと太さ、脈動する生命感に、二人はただただ溺れていた。

繋がったままの濃厚で長い静止。直後に、トウシュウの最後の理性が切れた。

「もう……耐えられん……！」

獣の咆哮に近い声とともに、トウシュウが腰を思い切り引き、勢いよく突き上げた。

ずぱんっ！！ ずぱんっ！！ ずぱんっ！！

破裂するような激しい水音が部屋中に響き渡る。大量の愛液と先走りが混じり合った粘り汁が、結合部から白く泡立って飛び散った。

前立腺を直撃する強烈な圧迫が脊髄を駆け上がった。太く血管の浮き出た肉太刀が、腸壁の襞を全て搔き広げながら最奥を容赦なく叩きつけ、汚い喘ぎ声が二人の口から漏れ出した。

「あぐっ……！ はあっ、はあっ！ トウシュウ……深すぎ……っ！」  
「ぐおっ……！ 観測者の中、熱くて……締めすぎだ……くっ、ぐううっ！」

トウシュウのチンポが前立腺を押しつぶすたび、甘く痺れるような電流が走り、排尿とも射精とも異なる渦が観測者を襲う。足の指がピンと伸び、腹筋が勝手に収縮してトウシュウの肉太刀をさらに強く締め付ける。海綿体が最大限に充血し、亀頭がさらに膨張した。快楽による交感神経の過剰興奮で心拍数が急上昇し、獅子の呼吸を荒く、唾液が滴るほど口を開かせる。

「ぐおおっ……！ 中が……吸い付いて……離さぬ……！」

トウシュウは本能のままに腰を振りまくった。獅子獣人の強靱な腰が、結合部でパンパンという音を立てる。

「ぐうっ……このっ！」  
パシンッ！ パシンッ！

己のチンポを持っていかれそうになる度、平手で観測者の尻を軽くスパンキングする。パシンッという鋭い音が響くたび、観測者の内壁がビクビクと収縮し、トウシュウの肉太刀をさらに強く締め付けた。

トウシュウは上半身を倒し、首筋に牙を立てて甘噛みしながら腰を振り続けた。熱い息と獣の体臭、汗と粘液の濃厚な匂いが二人の周囲を包む。トウシュウの肉太刀は怒張しきり、尿道が広がる感覚を自覚するほど精液が溜まっていく。

「もっと……奥まで……っ！ 拙者のっ子種を、限界まで注ぎ込んでやる……！」

トウシュウは肉太刀を根元まで深く埋め、腰を密着させたまま円を描くようにグラインドする。太いチンポが観測者の内部全てを搔き回し、敏感な粘膜を擦り上げた。溢れる粘液が泡立ち、結合部からトロトロと白濁した液が垂れ落ちる。結合部の温度は熱く、トウシュウの肉太刀と、観測者の雄膣が中を溶かすように熱を伝えていた。二人はもはや言葉もまともに発せないほど理性を失っていた。

「うぐっ……！ あっ、あっ、はううっ！」

「はあっ、はあっ……中が……吸い付いて離さぬ……！ くそっ、いい……っ！」

トウシュウは観測者の脚を肩に担ぎ、獣のようなピストン運動を繰り返した。ベッドがギシギシと軋み、汗まみれの肌が激しくぶつかり合う音が絶え間なく続く。時折肉太刀を引き抜きかけ、亀頭で敏感な入り口を抉るように刺激しては、再び根元まで叩き込む。やがて限界が訪れた。

「観測者っ……！ いくぞ……全部、奥に……受け取れ……！」

トウシュウは最後の瞬間、腰を深く密着させ、毛皮に覆われた下腹部を観測者の尻にぴったりと押し付けた。

ビュルルッ！ ビュルルルッ！

と勢いよく大量の熱い精液が、観測者の最奥へと直接注ぎ込まれる。射精の勢いは凄まじく、子宮口を叩きながら奥へ奥へと精液を押し込もうとするかのように脈打った。トウシュウの巨体がガクガクと痙攣し、獣のうなり声を上げながらも、決して腰を離さない。脈動に合わせて何度も小さく腰を押し付け、残りの精液を最後の一滴まで搾り出すように奥へ送り込んだ。

「……観測者……」

激しい交尾の余韻が、まだ二人の体を熱く包んでいた。理性が少しずつ戻ってきたトウシュウが、掠れた声で名前を呼び、熱いキスを落とす。

トウシュウの肉太刀は射精後も半ば硬さを保ったまま、観測者の中でゆっくりと脈打っている。溢れ出した大量の精液が結合部からとろりと零れ、シーツを大きく汚していた。獣の荒い息遣いが徐々に落ち着き、汗まみれの筋肉質な胸が観測者の体に重くのしかかっている。

「……はあ……はあ……」

トウシュウは額を観測者の肩に預け、掠れた声で囁いた。

「観測者……今夜は、拙者が……本能のままに、貴様を……酷く貪ってしまった……」

ツンとした朴念仁の性格は相変わらずだが、声の端々に照れと深い満足感が滲んでいる。

観測者が息を整えながら髪を撫でると、トウシュウは低く喉を鳴らして目を細めた。

「五日間……よく耐えたものだ。……感謝している。貴様と、こうして全力で交われる相手になれたことを……拙者は、嬉しく思う」

古風で硬い言葉ながら、それはトウシュウなりの精一杯の感謝と愛情の表現だった。耳の先が小さく動き、尾が観測者の脚に軽く絡みつくように動く。

「拙者も……もっと、貴様のことを知りたい……いや、知らねばならんと思っている」

観測者が「おれもですよ」と返すと、トウシュウは照れ隠しのように軽く鼻を鳴らしたが、すぐにまた優しく額を擦りつけてきた。

後片付けをする余力など、二人にはもう残っていなかった。

トウシュウはゆっくりと体を横に倒し、繋がったままの状態観測者を強く抱き締めた。まだ内部に収まったままの肉太刀が、時折小さく脈打つ感触が互いに伝わってくる。粘液にまみれた下半身のべとつきも、汗の匂いも、今はただ心地よいものに感じられた。

「……観測者。今日は……よく、拙者に尽くしてくれた」

最後にそう呟いたトウシュウの声は、すでに眠気に溶け始めていた。観測者もまた、重い瞼を閉じながらトウシュウの胸に顔を埋める。

二人は繋がったまま、深い眠りへと落ちていった。

六日目

翌朝、薄い朝日がカーテンの隙間から差し込む頃。

トウシュウはまだ観測者を腕の中に抱いたまま目を覚ました。繋がっていた部分は夜の間に自然と離れていたが、シーツの汚れと互いの体に残る匂いが昨夜の激しさを物語っている。

「……昨夜は、少しばかり取り乱した」

いつもの朴念仁に戻ったトウシュウが、照れ隠しにそっぽを向いて言う。しかし、観測者の腰に回された腕は、いつもより少しだけ優しく、離れたがらないように感じられた。

観測者が微笑んで「また今夜も？」と聞くと、トウシュウは耳をピクツと動かし、顔を赤らめながらも小さく頷いた。

「……うつけ者が。今回は貴様の功勞に免じてだな……いや、拙者は、約束は守る男だ。貴様が望むなら……今夜も、律儀に付き合ってやる」

そう言いながらも、朝の光の中でそっと観測者の指に自分の指を絡めるのだった。

みたいな甘々なのくれづヒ！！！！